

北海道だーい好き



NPO法人私設北海道開拓使の会理事長

石黒 直文

好き？嫌い？

「僕は、お金もないし、仕事だってはっきりしない。それでも結婚してくれますか」

「だってあなたが好きなんですもの。愛はすべてをこえるものでしょう。愛がなければ、いくら財産や学歴があったって、一流企業のエリートだって、イヤなものイヤ」

昔から、好きとか嫌いとかは、理屈を越えた不可思議なテーマだった。理屈どおりなら恋愛小説は成り立たない。男女の問題にかぎらず、好き嫌いは国や地域にとっても、眼に見えない魔力をもっている。ハーバード大学のジョセフ・S・ナイ教授は、米国のもつ最大の力の源泉は、軍事力や経済力を越えた「魅力 (attractiveness)」にあるという。

魅力とは何か。たとえば、あなたの息子か娘が、海外留学を希望したとしよう。あなたはどこの国ならオーケーを出すか。どの国の大学のレベルが優れているかを考えるのは当然だが、もっと先まで考えておかなくてはならない。数年外国に行っていれば、その国の若者と恋に陥る危険は当然ある。恋すれば一緒になりたい、一緒になれば子供が生まれる。生まれた子供は、その国の国籍を持つ。学校を卒業すれば、その国で職を求めたい、職が決まれば家を持ちたい。その場合、そこは差別のない自由な国か。よく考えた末、あなたはど

の国を選ぶか決めるだろう。その場合、世界の多くの親が選択をするのはアメリカだ。世界で最も自由で安全な国はアメリカ。その魅力が米国の力であり、資源なのだという。

米国の魅力とイチロー、マツイの選択

この米国のマジカルな力は、為替相場に現れている。

ところで、ちょっとお尋ねしますが、次の二つの国のうち、どちらの通貨が強いですでしょうか。

A国＝貿易収支大幅赤字、膨大な対外債務超過、国内物価上昇

B国＝貿易収支大幅黒字、巨額の対外資産超過、国内物価下落

バカにするな！B国に決まっているじゃないか。ところがどっこい、現実には逆だ。A国は90年代の米国、B国は日本だが、この間ドルは上がり、円は下がった。この従来の為替理論で説明不能の部分が米国と日本の魅力の差なのだ。(対イラク戦後のドル下落は自由と安全の魅力の減少の現れ)

いま、日本は、若者にとって魅力のない国になりつつある。このことが日本の長く続く不況の最大原因なのかもしれない。イチローについてマツイが、あの巨人を袖にしてメジャーに移った。巨人一辺倒であった地上波のプロ野球視聴率が激減し、逆にNHKの衛星契約が一千万を越える。野球だけじゃない。サッカーもゴルフも若者の心は、既に日本を離れている。スポーツ選手だけならまだしも実業や研究の世界でも、日本に見切りをつける若者が少なくない。

北海道へのエクソダス (民族移動)

日本の現状はわかったが、北海道はどうなのか。

芥川賞作家村上龍は、ベストセラー「希望の国のエクソダス」のなかで中学生たちに「この国には何でもある。本当にいろいろなものがある。だが希望だけがない」と語らせる。そして全国80万人の中学生が登校拒否をして北海道に移り住む。彼等がなぜ北海道を選んだのか。清涼な自然も理由のひとつだが、「北海道と沖縄の人だけには騙されたことがない」という北海道人の素朴さ、やさしさを最大の理由にあげている。中学生たちが希望のない日本の中であって北海道の自然と人情の

中に未来の夢を託しているというストーリーは、小説の中とはいえとても嬉しい。

「北海道だー好き」といっているのは中学生に限らない。すこし古い統計だが1997年に行ったNHKの県民意識調査で「自分の住んでいる県が好き」といっている県民の最も多い県は、北海道が91%で宮崎と並んで断然一位。自分の住んでいる県が好きなのは当たり前じゃないかと思うかもしれないが、埼玉、千葉、鹿児島では好きな人が6割ちょっとしかいない。茨城、滋賀では7割台にとどまっている。

道産子が北海道を好きだといっても始まらない。他の県の人には北海道をどう考えているのだ。実は、それも断然一番なのだ。「もし自分の県以外に住むとしたら何県に住むか」という問いに対して日本人の9.5%、約10人に1人が北海道を挙げる。第2位の静岡が5.8%、ついで東京5.7%、神奈川5.0%、京都4.5%と北海道の半分に過ぎない。

北海道の最大の資源＝北海道が好き

前世紀の最後の数年で、北海道の開発、拓殖という名の付くすべての機関は終焉を迎えた。北海道の所得ランクは低下し、資産も喪われた。そういった有形の資産の惨状にかかわらず、「北海道だー好き」というわが国で最大最高の北海道の無形資産は、その価値を失っていない。

われわれはこれまで間違っていた。北海道を良くするためには、企業や工場を誘致しなければならない。そのためには道路、港湾、工業用地、用水を準備しなければならない。また、産業振興のために特別融資制度や優遇税制、さらに補助金を用意しなければならないと考えてきた。それも大事でないとはいわない。だが、もっと大事なものは人なのだ。人の気持ちなのだ。鉄とコンクリートでハードのインフラをいくら作っても人は来ない。人が来なければ企業は来ないし、産業が生まれな

い。そのことを苦小牧で、石狩で、われわれはいやというほど経験してきた。

まず人。われわれはそう考えて、いまから約8年前、北海道へ移住を志す人々を支援する民間組織「私設 北海道開拓使の会」を作った。「私設」というのは、もう官に頼ることはよそう。できるだけ民間の力でやろう。しかも、開拓使の時代そうであったように、先に来た者が後に来る者の手を引いてお互いに助け合う組織にしたい。

いまこのNPO法人の会員数は、約3000人。その多くは、現在東京や大阪に住んでいるが、将来北海道に移り住みたいと希望する人たちだ。このうち300家族以上が既に移住を果たし、道内の各地で活躍している。

面白さをつくり出せ

繰り返しているが、日本人の多くが、北海道が好きだと思ってくださることはこんなありがたいことはない。ナイ教授が言うように地域の持つ魅力＝引力は、21世紀の最大の資源なのだ。北海道が、いまこの点で比較優位に立っていることは間違いない。だが、その上に漫然とあぐらをかいては、たちまち追い抜かれてしまう。他の地域は死に物狂いで魅力を増すために努力をしている。

地域の魅力は三つ。第一に人の心のやさしさ。いま、人はやさしさに飢えている。第二に自然環境の美しさだ。人工の醜さにあきあきしている。そして最大のものはその地域が面白いからだ。あの劣悪な環境にもかかわらず、若者たちが東京をめざすのは、東京が面白いからだ。北海道は、働くのに面白いか。遊ぶのに面白いか。知的な、あるいは感性に対して強烈な刺激を与える面白さがあるか。

いま、「あの人面白いわね」といわれることが女性にもてる第一ステップ。地域政策も同じだ。

■プロフィール■

石黒 直文 (いしぐろ なおぶみ) / 1931年中国大連市生まれ。1954年大阪市立大学経済学部卒業。1989年より北海道拓殖銀行専務取締役、1991年よりたくぎん総合研究所取締役会長。酪農学園大学環境システム学部教授、CWE取締役顧問、北海道国際航空相談役、北海道開発審議会委員、北海道経済同友会常任幹事、NHK北海道地方番組審議委員長、YMCA理事、北星学園理事などを歴任。現在は、北海道自然学研究所代表取締役、NPO法人私設北海道開拓使の会理事長、ルックヒライ監査役、パブリックセンター顧問、YMCA後援会会長、北海道財務局経済財政懇話会副会長、札幌コンサートホール・キタラクラブ副理事長。

著書に、地域開発資金(春秋社)、銀行論(青林書院)、北海道80年代の可能性(北海道新聞社)、北海道を考える(未来社)、北の発想ノート(北海道新聞社)、北海道夢宣言(たくぎん総合研究所)など。